

911.308

八

冬

分類号	911.3
圖書号	2912
卷册号	104
聖和學聖大	短期圖書館

俳諧十萬發句集冬之部目錄

冬之上

十月

初丁

神無月

小六月

二丁

小春

初冬

三丁

神留主

神送

四丁

連广忌

芭蕉忌

御命講

御取越

玄猪

五丁

十夜

夷講

初時雨

七丁

時雨

初霜

十一

霜

霜枯

十三丁

霜柱

霜花

初雪

冬構

十四

冬籠

炉閑

十五

口切

十六

寒

落葉

十七

木葉

十九

山茶花

山茶花

帰花

九一

冬牡丹 辛一

葱 辛三

根深

生姜掘

暖鳥

鷹

鷹狩

鷹野

冬鳥

王子酒 辛三

納豆

冬之下

極月 辛四

師走

臘八

夜配

事納

藥喰

佛名會 辛五

寒入

寒雨

寒声

寒月

寒念佛 辛六

衾

紙衣 辛七

蒲團

足袋

頭巾

湯婆 辛八

靴

臍

寒菊

寒梅 辛九

冬椿 辛九

冬蠅

冬山

冬日 辛十

冬田

節季候

古曆

餅搗 辛十一

歲暮 辛十二

曆賣

年市

年忘

年用意 辛十三

豆打

年木

年尾

年越

行年

年宵

年一夜 辛十四

惜年

年名殘

年別

年暮

大晦日

除夜

厄拂

掛取

罔見

春隣 辛十五

春待

春近

年内春

冬題不知

春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
...

俳諧十萬發句集冬之部

洞海舎涼谷編 一具菴一具校合

十月

十月	十月	十月	十月	十月	十月	十月	十月	十月	十月
...

名按 一 南

十月 神無月

十月の白をこき子とく礼を
十月やらの橋が娘の河
十月や秋の岸のさきも
十月や木橋の木の秋
十月のひまわりはさる小
十月は入る所のあはれ
十月や秋の木のあはれ
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を

松海 川丈 葛松 麓丘 壺平 角山 舞母 芭南 文廣 一盤

東京

小六月

小春

例のあはれ橋が娘の河
秋の岸のさきも
秋の木のあはれ
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を
秋をこき子とく礼を

古翠 五塊 之直 小松 二 白起 雁美 薪水 芭南 友之 委子

有春の字鞋を鳴か小春の如
 凌るのく相よ日れらん小春の
 桐陽上陽空のくらん小春の如
 何その日もえらん小春の夕日和
 石白の月を切考も小春の夕
 年尚上陽の白小春の夕
 う々雪籠の近及通る小春の
 宋初のくちをらん小春の
 産路の斗をらん小春の
 何物の産路をらん小春の
 山陽の板をらん小春の

左琴
 年暮
 全
 不着
 尚古
 全
 文光
 古琴
 川丈
 旭丘

小六日

小春

鳴るも小春の音を響かたり
 破のまれ只一軒小春の
 雀一羽叶四も小春の
 産るも小春の音を響かたり
 旅人の日暮をらん小春の
 小春の如くをらん小春の
 戸扉をらん小春の音を響かたり
 楸枝をらん小春の音を響かたり
 梅枝をらん小春の音を響かたり
 初冬の中庭をらん小春の
 初冬の中庭をらん小春の

楸
 実池
 松秀
 古琴
 宇不
 野湖
 全
 古梅
 昔谷
 森人
 子輪

初冬

御命講
御取越

若き意のうけ替も事記余う於
 時白雲やあま子宮ま宛信れむ
 北極の系流もうらや 露の日
 あら身命や 到身物の 杜 美
 こそ我意や 只の命も 人の心
 芭蕉意や 十信子世も 通やれ
 時白雲の 自れを 寄や 十二日
 此所 信の 長信子 寄る 花屋が
 此所 信解 あり 寄る 肉事 我
 人先く 寄る 跡り 寄る 山 我
 人先く 寄る 跡り 寄る 山 我

乙員
 舞母
 正 峴
 全
 全
 今
 古翠
 鹿左
 原 告
 久 藏
 巢 平

玄猪
十夜

尾原の連子も 係し 此九城
 若く通る 猪 熊 寄る 玄猪 我
 山 寄る 玄猪 寄る 玄猪 我
 柿 寄る 物 寄る 玄猪 我
 年 寄る 信 寄る 玄猪 我
 信 寄る 人 寄る 玄猪 我
 一 寄る 信 寄る 玄猪 我
 信 寄る 信 寄る 玄猪 我
 細 寄る 人 寄る 玄猪 我
 而 寄る 信 寄る 玄猪 我
 入 寄る 信 寄る 玄猪 我

多 女
 知 棧
 大 梅
 雄 嶺
 川 丈
 羽 人
 万 里
 永 平
 巢 平
 山
 蓬

有之の事形也曰く十松
 耳くく十松の心や旅号也
 素條子とよみの安る十松
 足底控へ較るる十松
 為仙中け十松の種の種
 片もまゝ重の由も十松
 是らんもかゝる十松
 〇前の繼事也也十松
 海人多れ古松の十松
 十松も活る海の十松
 是る異子老松の十松

芍薬 尺葉 日暮 吟鹿 遷休 月峴 宋子 杜舟 棠棠 玉葉 去子

十 十

夷 講

有之の事形也曰く十松
 始事よ古松能る十松
 本心かく重るる十松
 炭片くもりの十松
 枯竹も枯木も自ふ十松
 持事よ人押ふる十松
 床の分れ常事や十松
 素條子とよみの安る十松
 執事や肉事也也十松
 一〇空居る事の自事
 初燈の長除とる事

龍琴 一甫 常星 鹿掌 斗圃 古翠 確花 二洞 不曲 迦弥

夷講

了の元の新法右十松う能
 始事よ右法能う十松う能
 本心かく直も所う十松う能
 炭法ううの十松う能の人の
 枯竹も枯木も直十松う能
 枯竹も人押も十松う能
 床の分孔常事十松う能
 考論様も直十松う能
 執立女内事も直十松う能
 一十松う能の直十松う能
 形燈の直十松う能

多岐

一甫
 龍琴
 五
 富生
 夜琴
 斗圓
 古翠
 種花
 二洞
 不曲
 迦孫
 秋後

吾子牡丹梅くくく名ひは縁
 東海の小雪白くもた絶 春縁
 跡上る松の芳麝くく 春縁
 半の白日産掃くく 怪子縁
 價花の垂花宮中や 夫縁
 於てくくく 興をくくく 夫くく
 在河を草花はくく 夫縁
 何れも解於てくく 夫縁
 秋立の紅縁くく 夫縁
 舟玉の桐も物くく 夫縁
 篇くく 夫縁

永島 雨芽 木月 曾兄 一秀 石上 芦月 友之 左巻 三光 素心

初時雨

抱丁の切世味くく 夫縁
 瓶心の暖筆も 夫縁
 川をくく 夫縁
 栲舟もくく 夫縁
 初春れもくく 夫縁
 管舟もくく 夫縁
 初時白くく 夫縁
 空家の庭もくく 夫縁
 空をくく 夫縁
 肉もくく 夫縁
 春をくく 夫縁

川丈 稻香 夫二 做平 東川 乙書 雄航 古橋 杜来 菜路 山植

初時雨

砲丁の切き味。くく。去。縁
 ぬしの暖き。生かして。い。い。い
 川。ま。り。小。幸。や。な。わ。ん。う。う
 栲舟。と。る。切。れ。く。極。子。縁
 初。あ。れ。も。ぬ。も。庵。の。手。栲。舟
 管。舟。も。も。考。得。ん。初。い。い
 初。時。雨。の。降。う。雨。夜。れ
 空。空。の。熱。を。い。い。や。初。い。れ
 等。を。此。本。そ。ん。う。う。も。の。時。雨
 肉。の。骨。と。居。く。ま。う。物。う。初。い。い
 去。空。を。惜。し。ま。ん。う。を。初。何。も

川 丈
 稻 香
 丈 二
 湖 平
 東 川
 乙 去
 碓 杭
 右 橋
 杜 本
 葉 路
 山 陸

時雨

吟詠

春後〜と秋の海堂や初ふれ
葉草ま〜木の葉ひら〜初雨色
ふゆふよ松〜草や初ふれ
は官〜海〜し草と初雨色
露の結〜ま〜ま〜花やま〜雨色
舟五の初雨〜花〜ま〜雨色
權〜結〜ま〜ま〜花や初雨色
初ふれ〜花〜ま〜ま〜花や初雨色
初ふれ〜花〜ま〜ま〜花や初雨色
初ふれ〜花〜ま〜ま〜花や初雨色
初ふれ〜花〜ま〜ま〜花や初雨色

雲也 里竹 栗笑 幻芝 峰洋 札自 木公 自秀 翅空 田高 楊花

時雨の日は曇り降りてふれ初
雨の山花初雨の雲〜初雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色
初雨の元雲〜花〜ま〜雨色

桂海 蒼夫 雲竹 雨竹 玉和久 赤藜 古翠 川大 三丁 旭丘 無人

只情を時をよまけく藤の松を
面をくく影をよまけく松の松
志をくくや松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
相の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松

如仙 二晶 真燈 宇弘 万里 不曲 志山 篠山 木司 古掣 易足

志をくくや松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松
松の松をよまけく松の松

松井 今 今 今 今 今 今 今 今 今 今

一此白くく落つくや屋松の字
秀乃高しつ此の宮姫時を因か
志くくや包坐くのを杖もこ
時白くくや秋交まの和乃乃乃
立歸くく出く人妻よ志く終く
秋乃乃子乃市出ける時乃乃
撥くけく等乃乃乃乃乃乃乃
志くくや杖もつく向のより傍
不乃乃の空は乃乃乃乃乃乃乃
戸乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

大費 権因 彦年 後海 黄若 五風 一具 采子 然菜

時白くくやお春宿の人落ま
半の此身を控舞し時白く
川向くくや乃乃乃乃乃乃乃
志くくくや乃乃乃乃乃乃乃
本屋町の木乃乃乃乃乃乃乃
四五儀の昔乃乃乃乃乃乃乃
さめくくくくや時白の昔乃乃
志くくくや婢中乃乃乃乃乃乃
時白くくくや松乃乃乃乃乃乃
此乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
初秋乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

凍谷 全 双二 乃乃 白乃 乃乃 芽谷 梅香 荷乙 其美

初霜

霜

時をくや古人星乳塔の通出 名故 一甫
 河の島を的まうらん此れ 名故 一甫
 偏るまふはしをしを小秋分れ 名故 一甫
 ちく私の時をくは行か山 名故 一甫
 日影中の河を流るや林何 名故 一甫
 去るまや 名故 一甫
 初霜や細交小斗れ 名故 一甫
 ちく 名故 一甫
 樹木の葉をく 名故 一甫
 船のけの常きま 名故 一甫
 生初の子よ 名故 一甫

海辺を山のあそ 名故 一甫
 吹をく風や 名故 一甫
 橋のまよ 名故 一甫
 霧の初や 名故 一甫
 雲の 名故 一甫
 山里や 名故 一甫
 生初よ 名故 一甫
 杉の葉 名故 一甫
 枯柿や 名故 一甫
 百姓の 名故 一甫
 初 名故 一甫

霜柱

霜花
初雪

霜柱やけしむる義の智
 畏くけしむる物や霜柱
 霜柱の福力もつら霜柱
 霜柱の肉はあけしけし霜柱
 霜柱や名を霜柱まき来面ん
 霜柱はけしむる一色霜柱の産
 霜柱や名を霜柱まき来面ん
 霜柱はけしむる一色霜柱の産
 霜柱はけしむる一色霜柱の産

松海
 文俤
 米牙
 古翠
 旭丘
 羽人
 碧雨
 松秀
 南黄

初雪

霜柱はけしむる義の智
 畏くけしむる物や霜柱
 霜柱の福力もつら霜柱
 霜柱の肉はあけしけし霜柱
 霜柱や名を霜柱まき来面ん
 霜柱はけしむる一色霜柱の産
 霜柱や名を霜柱まき来面ん
 霜柱はけしむる一色霜柱の産
 霜柱はけしむる一色霜柱の産

伯丈
 古翠
 菊丸
 一惠
 竹里
 風毛
 竹馬
 夕山
 面夕
 多由女
 半五

木葉

木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か

斗玉
不着
尚古
留按
云々
全
美
一甫
常生
萬之
素志

木葉

木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か
木葉の種を来不為葉か

秋堂
云々
木公
古之
古川
文海
茶島
栢雨
黄雨
羽人
大末

茶花

松舎
三丁
湖
多
丁
心
稽
丈二
葉
雨
多
山葉をやくし葉の爲に葉屋
山葉をやく揚子此の用子
山葉をやく海子留子の先
山葉をやく咳と葉をよ見らる
山葉をやく子入と分ぬ老木が
山葉をやく市心とくく山心が
山葉をやく及く葉をくく葉心が
山葉をやく凡く葉をくく葉心が
山葉をやく難中市心と他心が
山葉をやく家の少葉と一葉
山葉をやく中上と一葉

松舎
三丁
湖
多
丁
心
稽
丈二
葉
雨
多

山茶花

歸花

山葉をやく子入と分ぬ老木が
山葉をやく市心とくく山心が
山葉をやく及く葉をくく葉心が
山葉をやく凡く葉をくく葉心が
山葉をやく難中市心と他心が
山葉をやく家の少葉と一葉
山葉をやく中上と一葉

雨
葉
大
子
荷
芦
一
去
若
桃
多

銀杏散

枯尾花

小まゝのやうなものをあつちのり茶
 古き一ツも古き九枚とて
 氏士とて枯尾の重なる花とて
 梅極よひのちのれとて銀杏散
 銀杏ちる舞や志んく考ふ
 一軒のりくく花より一礼尾花
 御川の音強くや枯男や
 小雀とて古き花や枯尾花
 一日も枯ぬ只ち一枯男
 空の雨の晴るも古き花尾花
 花のちる子枯のちりも古き花

九世
 喬竹
 名村
 久
 横海
 木
 大費
 丁知
 一具
 一梅
 一

枯州

土佐のちのち枯尾一尾花の
 地元の神尾花とて枯男
 初めは一尾花とて枯尾
 枯尾は月日の長きを
 尾花のちのち花とて
 山まよをち花とて枯尾花
 尾花のちのち花とて枯男
 花のちのち花とて枯尾花
 枯尾のちのち花とて日御
 甲舟のちのち花とて
 尾花のちのち花とて枯男

漆谷
 竹
 花
 桂秀
 思文
 藤和
 寛里
 五
 全
 乙
 水

冬

枯柳

草枯く礎三向る古樹くま
 枯中や雀の踏まぬ影の心
 雀のふむ草くま枯くま
 枯草や布あくるまの葉
 うれ草子味ゆやくまの白い
 うま叶の中より白くは
 心あくる草の枯くま
 枯草や鶴のふまの衣
 枯草まをのふまの柳くま
 うま柳川二まくまのま
 牛くま板あくるま枯柳

玉和之
 柳坊
 文海
 玄雲
 傳未
 五岷
 全
 全
 赤蓮
 文光
 丸来

枯芦

枯枯く翠芳あねまうま見入ぬ
 篠あまのまのまのまの枯柳
 新清まの物くあまのまの柳
 柳くまのまのまのまの柳
 屋根青の厚まかまの柳くま
 客傍の居まのまのまの柳
 うま柳くまのまのまのまの柳
 舟くまのまのまのまの柳
 うま柳くまのまのまのまの柳

如仙
 暮雨
 篠山
 多子安
 十翁
 寸石
 瀧美
 尖二
 尚古
 吾岷
 翠雲

茅枯くくく風以從く形
 う乳着の脚み来やや枯の来
 枯河や海くくくくくくく
 う枯茅よ一まうくくくくく
 枯茅よ乃粒里純燈くけく
 二まきまの枯ま居凡舟のぬり
 枯茅や海くくくくくくく
 うれ河の純風もおく塗子管以危
 枯茅の種先よやうくくく
 う毛茅や海も元のまをん
 若枯ぬ其をう衣を割るれ

枯海
 古翠
 魚木
 稜翠
 多よ女
 七高
 一之
 杏園
 宿望
 枯茅女
 後海

枯芒

枯河くくくくくくくくく
 うれ茅や舟もおくれくく
 以秋舟の本を操やれくく
 而ままの枯くくくくく

菅芒
 更川
 其笑
 一甫

枯蒜

枯くくくくくくくく
 二款くくくくくくく
 枯蒜よ所くくくく
 席の岸風くくく

大一
 野湖
 今

枯葎

了の蓮をもくくくく
 枯蓮や風くくくく

横海
 野湖

枯蓮

友於よま志くくく
 枯菴くくくく

葉菴
 芦宜

枯蔓

枯草

枯躑躅

石菖花

雪の空を染められたる枯草は
 枯草や少くもあつても一たまり
 木の葉のこぼれ葉や枯草はし
 ちまひ乳日乾きあつても花の影
 忘れぬよあけの空の月日乾
 ぬくけく老れぬ時の石菖花
 花の影の空を染めたる花の影
 以て自らも空の何れにせぬ花
 手入つても葉も先へあつても
 葉の影の空を染めたる花の影
 葉の影をく州に散らさるる花

葉新
 所出
 竹鹿
 草白
 雨草
 子病
 千山
 片席
 水水
 堆花
 鳥足

枯菊

麥時

菊枯し煙るる花もや少くも
 枯草や少くもあつても一たまり
 木の葉のこぼれ葉や枯草はし
 ちまひ乳日乾きあつても花の影
 忘れぬよあけの空の月日乾
 ぬくけく老れぬ時の石菖花
 花の影の空を染めたる花の影
 以て自らも空の何れにせぬ花
 手入つても葉も先へあつても
 葉の影の空を染めたる花の影
 葉の影をく州に散らさるる花

万里
 棋海
 素六
 高女
 岳林
 唐年
 柏樹
 深谷
 羽堂
 二在
 不着

大根曳

其後屋も高くと暮為博家
 生やま子と大根引
 礼儀くさる繁々大根引
 植枝上書所くわ女大根曳
 畑中や大根撥を鳥帽子祝
 申新ん肩より女大根曳
 村長も此ん子の日や大根曳
 赤ん子の十程より大根引
 船着の日く浦人此大根曳
 手近くは二廻く大根引
 仲風を振子足あつ大根引

和琴
 一 雅
 一 播
 松秀
 無人
 一 甫
 才治
 桂菜
 高之
 今
 和琴
 一 雅
 一 播

釣干菜

船所を結くを干菜く大根曳
 婦より婦の美く大根引
 二本と干菜と此より大根引
 二粒と干菜と此より大根引
 後向く能く此より大根引
 ちくちく男やうと大根曳
 妻のあまを干菜屋の大根も此
 引控く干菜や大根の引控
 以く干菜と干菜と此より大根引
 と向くも干菜屋の物あり
 舟舟より干菜の物干菜が

舟凡
 夕山
 松秀
 左琴
 吟霞
 一 甫
 五 屹
 丁 右
 陶 烟
 松 本
 横 琴

白鷺の足着きしる枯壁が
 柳も壁を枯くしあうる二所
 水戸御も赤く枯壁のそと
 ぬる所のふも好まう礼壁うね
 うねくぬ壁山の傳を考の傳
 山吹の枝細長く赤枯壁の神
 藤の枝短くくくる枯壁うね
 赤く赤くくくる枯壁のむく
 舟もくくくくくくくくくく
 美穂もくくくくくくくく
 出産く赤く山くくくく

永平
 古平
 多中女
 赤壁
 可厚
 文海
 風光
 古陸
 美庄
 湖月
 岳乙

碧りくく枯壁も一日くく
 赤くくくくくくくくく
 以これくくくくくくく
 秋もくくくくくくく
 山形くくくくくくく
 壁の柳くくくくくく
 董もくくくくくく
 竹もくくくくくく
 葉もくくくくくく
 葉先の立もくくく
 柳もくくくくく

耕舎女
 一之
 右直
 彦堂
 一甫
 名村
 素女
 藤雨
 水
 茅丸
 花父

冬野

冬枯

雁遠く飛渡るの音枯木が
 白く冬を告げる松の影
 赤いのはあつらひなく
 古き屋の末よる子聞ふ
 宿のや何きそよふ
 冬枯や煙のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ

葉茂 雁因 磐浦 惟孝 松丸 其北 榎海 松常 田島 右橋 菊雨

河鱈 豚

冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ
 冬枯や松の影のあつらひ

和琴 松丸 田島 右橋 菊雨 榎海 松常 惟孝 磐浦 雁因 葉茂

水
有る此華入るなる天宮の上
有る女月を指する向は春
有る女月を指する月のある
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ
有るの山よりなるといふ

○九二
吳 盧
羽 人
水 機
子 之
連 侍
丁 知
寸 石
生 菖
芦 菖
向 女

浮城鳥

鴨

有る上 秋の海くや中世港
有るの立居る女宮の船
浮城鳥を月の光も花も
餌をまわす菜屋の橋は浮城鳥
初め終末はくはさくめ電
水は後をよみ家く鴨の音
鴨居る女角うきけるも豆蔵
うき居る女浮城のありぬ一牧
能知をも著りかた女鴨の声
あゝかす鴨は小田を蘭も桂ん
小き美六吉岡の開好も女鴨の姿

芦 帆
尚 古
舟 序
玲 菜
丁 若
家 竹
文 光
如 仙
万 里
白 明
鼎 湖

鳴鴨さうんさうん女海の針
鴨あうやあ田子揚る雲の影
鴨の赤毛箱の底にや意の池
星あうや世打らぬ鴨の赤
うるあや秋の葉まの葉まをま
一概に日の出る鴨の赤まをま
鴨の赤まや赤まおけまをま松赤
葉の赤ま松柳の鴨の赤まをま
鴨の赤まや松の赤まをま五十一万
鳴るあう世作らぬ赤の赤の赤
松の赤まをま赤まや鴨の赤

水 氷
一 甫
大 揚
五 松
七 山
青 葉
新 赤
雨 赤
正 松
全 令

十

柳赤まをまをまをまをまをまをま
鴨の赤まをまをまをまをまをまをま
代葉の赤まをまをまをまをまをま
松の赤まをまをまをまをまをまをま
鴨の赤まをまをまをまをまをまをま
松の赤まをまをまをまをまをまをま
鴨の赤まをまをまをまをまをまをま
松の赤まをまをまをまをまをまをま
鴨の赤まをまをまをまをまをまをま
松の赤まをまをまをまをまをまをま
鴨の赤まをまをまをまをまをまをま
松の赤まをまをまをまをまをまをま

竹 松
五 竹
文 和
五 松
一 松
五 松
高 古
中 子
為 乙

小鴨

あぢぢ
千鳥

一 鶯 鶯子 鶯子 鶯子 小鴨 鶯子
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
水 水 水 水 水 水 水 水 水 水
山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯
松 松 松 松 松 松 松 松 松 松
杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜
栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗
芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦

双之 以 五 一 山 伯 松 杜 栗 芦
水 岨 水 水 水 水 水 水 水 水
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
松 松 松 松 松 松 松 松 松 松
杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜
栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗
芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦

杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉 杉
松 松 松 松 松 松 松 松 松 松
杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜
栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗
芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦
水 水 水 水 水 水 水 水 水 水
山 山 山 山 山 山 山 山 山 山
伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯 伯
松 松 松 松 松 松 松 松 松 松
杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜
栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗
芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦

全 机 一 白 糸 下 菊 正 尚 文 全
上 山 令 古 和
水 岨 水 水 水 水 水 水 水 水
月 月 月 月 月 月 月 月 月 月
松 松 松 松 松 松 松 松 松 松
杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜 杜
栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗 栗
芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦 芦

星風や利田と美浦のあはれ
 皆上とくきくはくお教子
 五更のゆきおれり鳴あし
 別を當りしは先のちとてが
 昔々さけりお子若も嬉し
 弓張の月のおうと女侍子
 鳴止せよお一夜もるお
 別ともさおゆとあつるちとてが
 遠山の月を限し寄ちとて
 松風子おを扇しとや鳴御
 子おのるおのちとてのちとて

上松
 去阿
 五峯
 大橋
 去、
 市原
 南自
 菅星
 橋海
 竹岫
 警平
 水

是の若る扇園情もあはれ
 何空とゆふお梅凡おくお
 官舟の桐子のあつるちとて
 亦は子おと揚つる鳴もあ
 山風子あつるゆとて中もあし
 小畑とてさるお子おお鳴あし
 寤ぬ内のおあつるおとて
 喰もあつる物のあつるおとて
 捨てるおゆとてさるおとて
 門先をさるおのあつるおとて
 伊荒のさるおとてさるおとて

宗飛
 李朗
 元陸
 川丈
 長彦
 木目
 栄徑
 大梅
 兼氏
 龍岡
 徳風

東京

悔やみ子もさるる田舎の事もあらず
 吹荒の風と月影や吹子も
 溜川や二つ子集りて啼きさるる
 衣ひきき着る戸や啼き子も
 片河の暮る暮屋坐る子も
 こんと夜く暮るくや啼きさるる
 朱籠の舟くき強く子も
 紫舟の面見送る女啼き子も
 たの白い夜以抱きさるる子も
 舟角屋よりけい子も
 舟戸船の櫓より向る子も

某橋
 一 月 堤
 船 籠
 紫 舟
 史 子
 南 橋
 可 憐
 杜 年
 涼 谷
 全

鴛鴦

鷓鴣

吹くける雪の飛方や啼き子も
 岩よりく苔の跡も啼き子も
 細き衣の河の舟地や啼き子も
 舞の葉もくく新や啼き子も
 新新屋のとれとれも啼き子も
 和歌も禰も志もや他のも
 鷓鴣や拘り附るるも
 去り言の歌の日も子も
 去り言の歌の日も子も
 井のみの水く流るるも
 船をよさるるも

四 葉
 五 本
 本 探
 石 籠
 葉 籠
 鷓 鴣
 鷓 鴣
 素 舟
 一 具
 示 水
 全

恒福志希の志くは我々の
 我々の心や生きたるの心
 鶴鶴ありは我々の心
 みるゝおれは心よきよきの上
 於乎志希少作心よき我々の
 心よきも世に生きたるの心
 我々の心よきも生きたるの心
 我々の心よきも生きたるの心
 我々の心よきも生きたるの心
 我々の心よきも生きたるの心
 我々の心よきも生きたるの心
 我々の心よきも生きたるの心

横海 栄権 乙光 全 川 旭 権 易 考 愚 栄
 海 権 光 全 丈 丘 根 年 澁 心 権

夜與世 柴漬

細代守

体初る事事事事事事事
 事事事事事事事事事事
 夕暮や一人きりの心
 夜與世や心光の心
 柴漬の心よき心よき
 柴漬や女の心よき心
 おの心よき心よき心
 心よき心よき心よき心
 心よき心よき心よき心
 心よき心よき心よき心
 心よき心よき心よき心
 心よき心よき心よき心

乙光 一甫 一具 舟 乐水 不流 多事

霜月

冬

冬

山里や十一月北極星古笛
霜月や旭の雀の垣長
霜月や星の光り如く
霜月や極の光り如く
霜月よ曲里の如く
霜月よ只傳の如く
木の名も霜月山の如く
霜月や旭の雀の垣

多由女
一南
布席
一栞
碧浦
菖水

十二月
霜月

冬之部中

山里や十一月北極星古笛
霜月や旭の雀の垣長
霜月や星の光り如く
霜月や極の光り如く
霜月よ曲里の如く
霜月よ只傳の如く
木の名も霜月山の如く
霜月や旭の雀の垣

多由女
一南
布席
一栞
碧浦
菖水

若故

冬至

十二月 霽日

霜月の時米をうへ油賣
おと来す元虎玉の御事
雪より雪物喜ぶ所のを玉が
船のりよはあなの子孫を玉が
欠ぬきさく市のを玉のた玉が
井戸堀の繩を玉のり玉が
辻上の子孫を玉のり玉が
冥の戸の旭を玉のり玉が
船のりよはあなの子孫を玉が
榎の松のりよはあなの子孫を玉が
濱の屋敷へ来す時を玉のり玉が

全 全
丸 彦
漆 谷
多 女
桃 竹
全 全
大 橋
布 席

鬘置 袴着

貞見世

子祭 子燈心

燈立の鬘置はうへを玉が
舟を玉の具船をうへを玉が
袴着の如きはあなの子孫を玉が
袴着の袴をうへを玉が
貞見世の雲を玉のり玉が
子祭の如きはあなの子孫を玉が
子燈心の如きはあなの子孫を玉が
舟を玉のりよはあなの子孫を玉が

名枝
一 舟
貞 岩
全 全
川 丈

冬

吹草祭 御講

里神樂

鉦 叩

石傳のぬや吹草祭の青々
 有のぬや枯や吹草祭の青々
 馬傳や吹草祭の梅の青
 後刻の梅の青々より
 笛吹の一人青吹 神楽の
 生徒を各ぬけり
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より

草井 榎海 一色 多喜女 楽の 松和 川右 不曲 易事 多喜女 布席

冬

吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より
 吹草祭の青々より

久藏 一具 松嶋 芦帆 榎平 木司 西女 友之 志興 寛生

月

冬月

頃初る月や楳の楳の葉
 なる月のまゝ物形向の流る
 月海へくさゆる船の吐く水
 山ややなるる海に井戸の縁
 冬月の海流の戸口をくぐりて
 生雲の志心石怖く冬月の
 冬月の海流をくぐりて
 流楳の上をゆく冬月の
 中身の葉をくぐりて冬月の
 冬月の海流をくぐりて冬月の
 松風の吹く海をくぐりて冬月の

赤黄 蕉丘 葉三 涼谷 田葉 全 李 旭 全 旭 全 旭 全

冬月の地よき冬月の海をくぐり
 人の海ぬ肉よ出さる冬月の
 冬月ぬ大砂系や冬月の
 冬月の海も楳の真や冬月の
 冬月の海一海流をくぐりて冬月の
 冬月の海一海流の志心や冬月の
 冬月の海一海流をくぐりて冬月の
 冬月の海一海流の志心や冬月の
 冬月の海一海流をくぐりて冬月の
 冬月の海一海流の志心や冬月の
 冬月の海一海流をくぐりて冬月の

確 楳 海 多 冬 真 秋 才 居 涼 谷 文 海 山 雄 梨 浦 白 起

香の月交つる山を傳たり
 松木一枯とて由るや香の月
 尖のふれ重り伏や香の月
 香の月の山を傳たり
 山支乳捕るる香の月
 谷道の曲るるや香の月
 香の月の山を傳たり
 松木一枯とて由るや香の月
 尖のふれ重り伏や香の月
 香の月の山を傳たり

夕山
 素白
 戴星
 竹葉
 一具
 文光
 名村
 一甫
 五峴
 全
 大模

木枯

香の月交つる山を傳たり
 松木一枯とて由るや香の月
 尖のふれ重り伏や香の月
 香の月の山を傳たり
 山支乳捕るる香の月
 谷道の曲るるや香の月
 香の月の山を傳たり
 松木一枯とて由るや香の月
 尖のふれ重り伏や香の月
 香の月の山を傳たり

素白
 雨行
 楽水
 李朗
 文鬼
 長彦
 陶烟
 量山
 不流
 古學
 粗年

木枯

木枯し北風吹く乗や大雪也
吹くも木枯し吹くも
風や木枯し吹くも雪の豊
木枯や木枯し吹くも雪の豊
風や木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊

兼氏
今
大貴
唐年
一具
文海
琴浦
新水
呂舟

雪

木枯し吹くも雪の豊
風や木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊
木枯し吹くも雪の豊

上野

山笑
素白
古川
竹林
高麗人
松竹
吟鹿
西布
二丘
大梅
一笠

物も生かす能く 空の雲
 春も中々十日 空の雲
 柳の雪一掃 空の雲
 枝も丸ん 空の雲
 又使も持 空の雲
 隠密も 空の雲
 神代より 空の雲
 浮世の 空の雲
 松の雪の 空の雲
 生れぬも 空の雲
 秋の空 空の雲

其 返
 字 井
 文 光
 波 史
 古 學
 流 左
 強 哉
 蕉 在
 糖 々
 二 晶
 貞 煙

七言も限るぬ 空の雲
 海客の 空の雲
 又ましく 空の雲
 著 空の雲
 生 空の雲
 予 空の雲
 行 空の雲
 神 空の雲
 情 空の雲
 吸 空の雲
 袴 空の雲

不 曲
 不 傳
 龍 化
 咫 雲
 古 翠
 舞 母
 此 洲
 全 無
 全 妹
 大 費

竹東や 壽院まきり 香の香
 月一風船を三交引 香の日暮
 花の香子 香の香 香の香
 暮子 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 一日 香の香 香の香 香の香
 大名 香の香 香の香 香の香
 持物 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香

全 杜 全 一 松 一 月 香 丁 史 一
 全 年 全 面 岬 堂 宅 子 皇

香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香
 香の香 香の香 香の香 香の香

香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香
 香 香 香 香 香 香 香 香 香 香

此の雪鏡し修うぬめく
 一歩や六十歩あ 雪ふふあ
 雪ふ折るや折切ぬ基よ論と雪
 手を伸てあそくもく秋の雪
 雪降やふぬ入る 於のうち
 雪降やよと平の神あり
 よう向し此境月も流し雪の屋根
 雪ちるや庭よ小松の折し支物
 持宿るや折折るきんけの雪
 屋根の雪うの積ぬぬ戸口
 湯の煮えもゆぬ雪のあま

雪草
 文海
 高よ母
 皆谷
 四明
 全
 磐浦
 抱琴
 お赤
 松棠
 杜賞

うけんあく油をほくや雪の春
 又とゆふ折是あや 雪ふれ
 人初より雪の折るぬ雪の春
 雪の屋根雪の依のまげきん
 四季の色薫しと雪の雪
 袖の雪附く折也戸口丸
 月雪の雪うの雪を降埋む
 降止く月よ折る雪の折
 一折の雪屋さうと雪の折
 折の雪送る人よあつと
 雪うもあ折る雪屋山あ

白起
 何年
 荷了
 耕雪女
 松竹
 松月
 呉洋
 芦直
 木架
 全
 柱秀

ちよとくくと千能て挿又の雪
 何うかて落ん中へ松の雪
 雪の音を挿やん中まを挿く
 雪の白粒以つて雪をう雪の中
 挿何をも車てふはくは雪の
 似珠の粒物さるはや雪をう
 一群よ小を挿く雪の系
 秋雪の雪片利挿打函る
 雪の日の終くも雪まう
 雪の山の雪えくも雪う南
 雪の雪挿くも雪やれ品美し

一之
 全
 新水
 思文
 古川
 芝葉
 一竹
 芭角
 落平
 石籠
 友之

一新て日の雪まう雪え挿
 雪の雪やう雪の雪の中
 雪の雪の雪を挿く雪の舟
 大雪よ易い米うぬ雪挿
 雪挿や雪の雪米挿為挿
 雪中よ雪の雪の雪の雪
 雪の雪の雪の雪の雪の雪
 挿く雪の雪の雪の雪の雪
 雪挿を挿く雪の雪の雪
 うけまよ米挿雪の雪の雪
 雪を雪の雪の雪の雪の雪

全
 丈二
 木公
 全
 多よ
 二丘
 全
 全
 全
 全
 不美

雪傳や家のくまの紅葉如
雪振ひくく 崎のあふもく
雪のひや二所の角の桜桐葉
雪斗 浮御しきう 影の雪
雪の早の雪を跡にさる舎うき
雪の雪を雪をけけや 由委
雪傳をし 崎次雪の解 け家
雪の雪を越く 飛く 雪をさる
脚觸をさるをさる 崎の雪を
雪の雪の雪をさる 崎の雪を
白程子雪の雪をさる 崎の雪を

宇島
幻芝
月露
而直
五竹
一甫
一陽
乙産
五峴
全全

下弦

雪傳をさる 崎の雪をさる
雪の雪を越く 飛く 雪をさる
脚觸をさるをさる 崎の雪を
雪の雪の雪をさる 崎の雪を
白程子雪の雪をさる 崎の雪を
雪の雪を越く 飛く 雪をさる
脚觸をさるをさる 崎の雪を
雪の雪の雪をさる 崎の雪を
白程子雪の雪をさる 崎の雪を

東樗
玄く
雪風人
雪岩
素心
昔谷
秋堂
節之
全
多女
全

ほきくく雪を懐くけあ雪
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟

多子女
布席
全
鷹く
大梅
田華
全
竹油
双二
赤英
文鬼

雪舟

多子女

雪舟

雪吹

雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟
雪舟の雪を懐く雪舟

涼谷
眉蕉
南陽
右拳
古翠
五峴
全
全
乳云
病乙
桂葉

雪見

雪佛

新氷屋の風呂場の雪雪雪
掃きとるる物を木乃く雪見か
雪見さんくもり若木名の為
雪をえん子雪の依ふり家入
一人系し子子舞し雪見か
懐かしきけりく懐る雪見か
雪をえん子乃くくし海うき家入
雪をえん子乃くくし海うき家入
雪をえん子乃くくし海うき家入
雪をえん子乃くくし海うき家入
雪をえん子乃くくし海うき家入

〇五十

大梅
二品

雲峯

葦山

一蓋

月峴

松葉

月一

自峴

英山

玉葉

雪丸

雪垣

雪車

氷 扱

雪丸 稚子物をまき拾子く乃
雪垣 志くくくく子乃雪丸め
雪垣 雪垣を志くく乃く子く乃
雪垣 雪垣を志くく乃く子く乃
雪車 引雪車の依りまき乃山の子
雪車 舟引や若くく乃雪舟の依
雪車 舟引や若くく乃雪舟の依
雪車 舟引や若くく乃雪舟の依
扱 扱の依り山乃のあふれ
扱 山乃や扱扱乃く子乃の依り
氷 川や氷を砕く梅の依

五臺

只办

元琴

宇琴

篠山

右拳

五峴

右亮

蒼文

鼎湖

然菜

氷る初や冬籠の上を掃の上
 暖のうらちもあま氷うら
 初る白や舞うよめる谷の家
 初る初や以て物をせん唐菓子
 氷る初や何処やう肉の廣く練
 一つ家の梅を初る凌ぐ初
 初る初や松より下を流あじ
 菜の氷拵よを遣入戸口を
 夏有角屋の只く掃くを氷うな
 あま初る初るを蓮を養きん
 特よ初る氷の橋より初るものも

大梅 香泉 羽人 此心 今水 不依 蒼蒼 尺葉 吟霞 一蕙

無くくもや氷も所き物
 淫雪の雲中あま掃く初
 氷る初や梅垣角を初る初
 初る初やあつとあまや初る
 初る初や掃くを以て初る初
 初る初や表裏初る初る初
 初る初や人を通は初る初
 初る初や来る船舟や初る初
 初る初や投出を初る初
 初る初や初る初る初の上
 初る初や初る初る初る初

後海 小圃 慈棠 草松 雪草 初堂 在秋 柳樹 文来 凉谷 初堂

柱杖をく実刺して折れぬ
 振兒をく問ふ物も女若の先
 蓋けのるる世傳の氷う乳
 信をく鬼のまをく物至
 明女の面を二重子氷うま
 吹をく物子のまを物うま
 第一回の物子物う女這入口
 四平子の折ゆゆや雄のまを
 山風のまをんう物子物う
 氷う万乳まを陽春の這入口
 考の又見まゆり他の氷う物

女鬼
 松月
 一之
 夕山
 女子
 女
 左考
 木公
 今高
 丈二
 尚古

鐘水
氷柱

霰

百餘を竹杖氷う且う折
 戸の氷氷の光る自折氷
 物うまぬゆまを物う物
 持をるるまを戸の爲る物
 手録を物一の先の物うか
 物うるまを物の氷柱のまを
 物うまゆ氷柱まを先母ま
 物う物掃て物う物う物
 玉雲扇物う物う物う物
 玉雲扇物う物う物う物
 一いつ算をまを物う物

今
 一
 素女
 雜因
 奴二
 熟菜
 瓶乙
 古
 有氷
 蓋山
 若機

谷川や瀬し流るる玉露
 橋上の橋よあはれなる河に
 橋の利方の目使や飛あも
 夕河にれ登るるよも浮遊ん
 着橋やすくはれ河よとく
 鶴やを急招しと橋の上
 生家の橋をぬきし河に
 空の橋よまを重とあも
 祝儀の玉座は空を重とあも
 空を舞ひし青の鶴は河に
 大粒よ重を浮也出口より

古翠
 菊丸
 赤堂
 久藏
 無條
 新巢
 一具
 紫蔭
 杜年
 文富
 林園

實

新の船を舟をいふ女を重く
 算ても足らざる重きを舟の中
 とれとてし重き重きと菜の重
 米粒の重口ふさふさの重
 押出せし人舟の舟の重
 相属の縁網を重く重く
 押廻る人舟の舟の重
 残りの舟の舟の重
 松を重く重きを舟の重
 と重く重く切重橋よ人
 重やと重止む重

菊丸
 紫蔭
 杜年
 文富
 林園
 乙雅
 迦孫
 雲翠
 屋舟
 里舟
 應く
 丹帆

冬雨

一 冬
 二 雪
 三 雨
 四 霜
 五 霰
 六 霙
 七 霧
 八 露
 九 雪
 十 雨
 十一 霜
 十二 霰
 十三 霙
 十四 霧
 十五 露

巨燧

一 燧
 二 燧
 三 燧
 四 燧
 五 燧
 六 燧
 七 燧
 八 燧
 九 燧
 十 燧
 十一 燧
 十二 燧
 十三 燧
 十四 燧
 十五 燧

一 燧
 二 燧
 三 燧
 四 燧
 五 燧
 六 燧
 七 燧
 八 燧
 九 燧
 十 燧
 十一 燧
 十二 燧
 十三 燧
 十四 燧
 十五 燧

世上の事んは物候けに長煙
物々子々を慮おゆる長煙は
ぬらりと旭をのきよあつう形
杉也長煙を囲ふる風風
強有先の付けや並生煙
去らるる為まを替る老母が
長煙を病うぬ棚のまらう氣
病う人子舎精くせ出る長煙が
霧う人も宿候子候くあつう
杉也長煙の屋の炭の香
世事もる杉也煙く長煙が

古陸
松竹
雲霞
一之
全
芦帆
玄子
五
全
集
多
多
女

囲炉裏

火鉢

埋火

表碁一重の目之に囲炉裏が
兄弟う横坐し單におゆるが
あまのりう金く並におるが
出らるのびる子成るを所が
杖うう梅子を出人中所が
大生所が坐の人におるう有
修物の重るよ借るを所が
孫の手をぬらぬて替る所が
水向再よまう礼く中所が
並女の横坐しを所が
埋火を以つうる所が

多
横
迦
露
キ
盤
夕
丈
二
五
不

楮

埋せや粒列々る世捨人
 埋せよ子空敷高々也世更成
 埋せよを市り世凡者や枕をと
 埋せよの鳥跡高々や甲の産
 埋せや月待と此捨とる
 埋せよの鳥出々る産産の
 埋せや産松を鳥の歩の若
 埋せや産産々々此産 禱
 埋せや一ツ角々々る産の
 埋せや西月子似と産の若
 埋鼻く出々産産々捨せ

有水
 若機
 丹湖
 多よ
 多席
 尺系
 才法
 全
 多よ
 字形

楮々々や字士た々小悪作
 亦々楮々し月を鳥んや海々
 楮々々や楮の這形川燈先
 亦々楮々川を楮々向月士
 楮々々や亦々向々け染鳥よを
 亦々楮々や楮々々々々々解の内
 仲人のまれ々々調々楮火也
 楮々上少然々々々々楮々々々
 時志れぬ山々々の楮々楮々
 ぬん々々て向々々々楮々
 然々々々々々々々楮楮

可乃
 松竹
 左陸
 笑盡
 果笑
 丸来
 旭丘
 惟字
 象石
 高堂
 丹湖

有りて来りて投出凡蒸や樽のり
佛人のちと取ひはる樽を必
糸を子めわく出や樽のり
偏をを来りて樽より向く子
有る強の障りも来り樽のり
透りとしも来りて樽のり
降し樽を向くはくや樽のり
樽を来りて樽のり
蒸りて来りて樽のり
有る子来りて樽のり
樽のりやはる細文のり

多の女
野棠
一具
何来
一需
甫心
友之
寛生
五况
全
来心

炭

炭水を投出くくよる樽を必
炭の来りて子来りてのりて
有る子来りてのりて
よる子来りてのりて
有る子来りてのりて
炭水して人樽よりも来りて
とて此中の炭水はる樽のり
樽のりて凡る肉やも来りて
とて樽のりて炭水を来りて
炭水して来りて樽のり
有る子来りてのりて

節之
耕堂古
羽人
二晶
永号
全
礎積
一具
小圃
子路
斗圃

炭竈

川春の壁を傷を切り去る
 掘くは終らざるや炭の屑
 炭碎く春の節の枝交る角
 うけととも男世帯やまじり炭
 炭屑とともは煙る女木の種
 も終炭の吐と終る生炭が
 柵くは終らざる炭の煙り際
 炭屑つ終の赤の炭見出
 炭竈や老る手ももくし
 炭竈は鬼を掃出は終る
 炭竈や炭の屑ももくし

桂皮
 左券
 川長
 二晶
 禾木
 土の塊
 喜路
 薪水
 一具
 一之
 炭目

炭燒

冬餅

粉丸や世一竈もく手多炭
 背戸山や古更もく手多
 七更もく手多もく手多
 炭燒のより方切りもく手多
 炭中木の屑白を木の屑もく手多
 もく手多の屑もく手多の屑もく手多
 手多を延してもく手多もく手多
 手多や極の木の屑もく手多
 杉葉と杉葉又杉葉と杉葉
 張る手多と杉葉の屑もく手多
 杉葉の屑もく手多もく手多

杉木
 涼谷
 無林
 木水
 一水
 一蕙
 夕也
 高木
 杉木
 杉木
 尺葉

火桶

炭俵

冬

生をんまをあら梅也相空梅
 高あ子下空よりん空梅也
 海空やほく廻ん相空梅
 推具の丸の手拵ふ空梅也
 手空をい老角昔も空梅也
 空くして空る空梅一ツ子空梅也
 空くく空く空く空く空梅
 情の空空くぬく空く空梅
 空の空も空くぬく空く空梅
 空の梅 空く空く空く空梅
 空く空く空く空く空梅

冬梅

冬至梅

一具
 推巢
 然巢
 荷乙
 杏園
 空在人
 回第
 十第
 風毛
 水
 空

空山を修空くも空ぬや空の梅
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空
 空の梅 一ツ空くも空くも空

篠山
 唯松
 尺景
 文呂
 縁平
 空石
 丁知
 白起
 昭眉
 芭角
 秋空

水仙

情さうと見花をさうとさうの梅
雲のよもたのよも来ぬ梅のや
元々く跡さうとさうと水仙や
水仙のさうも持るぬさうと
さうとさうとさうとさうと
水仙や画さうとさうとさうと
水仙や月さうとさうとさうと
水仙や梅のさうとさうとさうと
月のさうとさうとさうとさうと
梅さうとさうとさうとさうと
水仙や梅さうとさうとさうと

巻

面や女
一具
雲付
三枕
茶井
煮古
夢而
不曲
葉乎
雨明
万里

水仙

水仙やさうのさうとさうと
水仙は日教さうとさうと
水仙のさうとさうとさうと
水仙は行院さうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと
水仙はさうとさうとさうと

多よ女
氷谷
大葉
全
葉氏
の傳
丁吉
多よ女
棠郊
多よ女
文来

冬牡丹

冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家
冬牡丹は花未結し一管の家

植芽母
芦月
左片
右味
玄く
碧浦
孔正
全
稻馬
柳花
西蓬

葱

根深
生姜掘
暖鳥

大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹
大少もくん可人や冬牡丹

右翠
雨芽
棋海
松常
陶烟
冬子傳
秋堂
一甫
棋海
松常
美及

主善林
跡

鷹

鷹狩
鷹野
冬鳥

ゆきにれしき鳥よを也 暖鳥
ゆきとりのむもあけの暖鳥
木多野すく飛多うぬらぬ鳥
身振ひも空の鳥多う暖鳥
ゆきをさく人よ口惜しと
とくく鳥志く鳥出ん 暖鳥
岩山や切とを通る鷹の鳥
物鷹の鳥志くけく鷹の鳥
鷹の鳥や善良の鳥志くけく
松尾も松木も志く子鷹の鳥
鷹ととく強く恒林や志の鳥

玉和久
鷹く
古翠
文鬼
痛勇
涼花
素心
五况
桂善女
芦帆
涼谷

王子酒
納豆

鷹鷹子位免の鷹列る鷹の鳥
市仕存さるるの中や玉の鷹
梳の鳥氣鷹の鳥氣や納豆汁
よ起人のとくく好し納豆汁
おまの鷹志く地志く納豆汁
是まきく桐子の鷹や納豆汁
鳥の鷹志く子鷹や納豆汁
形く鷹梅志く鷹志く納豆汁
着徑よの志く納豆押く
信鳥の鷹志く鷹志く納豆素
新書の刻の時めく鷹納豆汁

三
柳曲
素心
木水
松秀
方居
節之
松美
吟友
友之
素来

冬

橋毛後子出さるく納豆小

菜白

破甘く去る乳も去る菜一把

水乳

解今子淫愛せしる玄糖分

被及

今

石河舟を吹出す去るや解く交

真直

木くく解く一板通乳く乳分

今

去る乳も去る去るぬけし交

吐香

卷之部下

極月
師走

極月や一箇の去も去る上

三柳

山あり乳も去る去る海を去

文光

海ありも海を去る果や日影

高堂

橋毛く橋ありし石河舟を

高堂

人並子海をの市を通り乳

大費

とく去る去る去るの去る海を去

高堂

赤装海あり海を去る候く去る

新有

米糲の糲く去るし海を去

行丸

臘八

衣配

車納

菜喰

月よあけの月よ利きん酒を飲
 陸梅喰く十香立佛を食
 手乾荒を平よき香師を食
 織うりこ挿をよ来茶を食
 割舟の迎候のる陸を食
 臘ハヤ三天積る唐の雪
 臘ハヤ五来香の挿を食
 衣配物は清くえる油をの挿
 衣配 産の羽をのん後御衣
 茶屋は六梅よはくよ了燈納
 梅を石ぬ人は似る茶菜喰

芝菜
 芦帆
 加多女
 五岬
 裁星
 宇島
 戸山
 多喜
 松竹
 多喜
 篠山

佛名會
寒入

燈火の原をよも茶や菜を食
 菜を食は清くよ清く通るを
 一人生く妻をよ出さや菜を食
 仏名を講くわける実を食
 寒の入り日を清くよ清く食
 是後して是を食茶を食
 始入の佛喰ひく入る入
 寒の入り時や難得茶を食
 寒入や明くも自入茶の上
 寒茶を食の茶持る餅を食

茶飯

菓平
 積家
 香薷
 六拳
 雨考
 一甫
 名村
 五岬
 碧満
 一甫
 茶飯

寒雨

春少降もやまりるをさるの月
 志せはぬ本海乃やさるの雨
 ちや暮の暮さるはらやさるる
 田畑のゆくしぬぬさるの雨
 さるさるや亦日此月の出まき
 さる月や望みさるく松の乳
 さるくくの泣きあさるやさるる
 さるのまきさるさるの光り
 さる月の移る様や市の形
 さるく子惜しすぬ松の尻り
 さるくや枝まけさるもさるる

梅海
 種因
 易手
 多よ女
 雨行
 ぬ旭
 菊山
 換法
 雨明
 ちうま
 葉蕪

寒声
寒月

寒倉佛

さるくくや暮の這ゆさのぬ
 さる月や佛さる市のをり
 さるくくや梅照りさるる
 さるくくや暮交さる持一さる
 さる月のまきさるくくやさる満
 さる月の風さるまけぬ光りさる
 さるくくくや抱くぬさるさる
 さるくくくやさる子尻り竹の乳
 さるくくくくくく選子さるさる
 木指の尻子尻りさるさる
 秋のゆくさるさるさるさる

桂秀
 涼谷
 子孫
 文海
 蓬子
 一行
 一坊
 龍化
 一具
 松秀
 字井

食

月桂を何処まであり
 証をいふや嵐の巻
 少丹や萩のつる
 多仙は信守の巻
 二月は信守の巻
 有るおや人の巻
 秋意押さく林
 多仙は信守の巻
 鶴の足何とて

旭丘
 松葉
 芝葉
 素束
 全
 米舟
 史子
 素束
 茶葉
 多丹
 聖南

賦中

紙衣

多仙は信守の巻
 秋意押さく林
 多仙は信守の巻
 鶴の足何とて
 二月は信守の巻
 有るおや人の巻
 秋意押さく林
 多仙は信守の巻
 鶴の足何とて

一
 南月
 芝葉
 素束
 一
 一
 一
 一
 丁知
 杜葉
 夕山

蒲團

足袋

頭巾

清上は清く、誠意を送る意
 中の上は、清く、誠意を送る意
 松苗は、清く、誠意を送る意
 日影は、清く、誠意を送る意
 新ふちと、清く、誠意を送る意
 先づ、清く、誠意を送る意
 足袋は、清く、誠意を送る意
 子一、清く、誠意を送る意
 清く、清く、誠意を送る意
 相考、清く、誠意を送る意

一 浦
 一 水
 二 二
 如 二
 久 二
 杜 二
 小 二
 伯 二
 尤 二

湯婆

湯婆

古の程、湯婆の意、清く、誠意を送る意
 う、清く、誠意を送る意
 湯の意、清く、誠意を送る意
 相考、清く、誠意を送る意
 湯婆、清く、誠意を送る意
 湯婆、清く、誠意を送る意
 湯婆、清く、誠意を送る意
 湯婆、清く、誠意を送る意
 湯婆、清く、誠意を送る意
 湯婆、清く、誠意を送る意

一 晶
 二 晶
 三 晶
 四 晶
 五 晶
 六 晶
 七 晶
 八 晶
 九 晶

駁

駁

寒菊

寒梅

何くそや言まはれそは
 あくらの上をさすれば
 針の考やおれたら
 栞の手の重なる
 春をたかや空
 春を素子者中
 春をたかや相代を
 春を梅や田の
 春を梅や會
 春を梅や惠

茅九
 五况
 長夷
 植秀
 常席
 雨明
 文光
 乗三
 大梅
 吟意
 杜賞

冬椿

冬

冬梅や花の
 春梅や雪
 春梅
 春梅
 春梅
 春梅
 春梅
 春梅
 春梅

左琴
 萬之
 元子
 川也
 了身
 斗延
 久侍
 涼谷
 湖舟
 其笑
 政高女

冬 蠅

冬のあま日紅 柳のまゝり 冬を 桃
冬の日紅 一日 咲く 冬を 桃
影も亦く日紅 冬を 桃
赤梅 冬を 桃
飯所の冬を 桃
鯛の尻の冬を 桃
初冬の冬を 桃

南丹 全 凉谷 古家 小圃 乙 素 易 初

冬 山

冬山 柳のまゝり 冬を 桃
松の冬 柳のまゝり 冬を 桃
冬山 柳のまゝり 冬を 桃
冬山 柳のまゝり 冬を 桃

冬山 柳のまゝり 冬を 桃

冬 日

冬の日 柳のまゝり 冬を 桃
冬の日 柳のまゝり 冬を 桃
冬の日 柳のまゝり 冬を 桃
冬の日 柳のまゝり 冬を 桃
冬の日 柳のまゝり 冬を 桃

冬山 柳のまゝり 冬を 桃

冬 田

冬田 柳のまゝり 冬を 桃
冬田 柳のまゝり 冬を 桃
冬田 柳のまゝり 冬を 桃
冬田 柳のまゝり 冬を 桃

冬田 柳のまゝり 冬を 桃

冬 節季候

冬節季候 柳のまゝり 冬を 桃
冬節季候 柳のまゝり 冬を 桃
冬節季候 柳のまゝり 冬を 桃

冬節季候 柳のまゝり 冬を 桃

積李類

昔者人の附南りて、積李の葉
 昔者人の家、鴨踏む、此也
 昔者人のや、洞をいりて、此也
 昔者人のや、志と在り、此也
 昔者人の、海屋へ、這入、日暮り
 昔者人のや、宿り、此也
 昔者人の、一日、此也
 昔者人の、荒神、此也
 昔者人のや、具、此也
 昔者人のや、此也
 昔者人のや、此也
 昔者人のや、此也

多由
 布席
 史子
 古陸
 里月
 月雲
 田集
 南山
 左集
 旭丘
 松秀

煤掃

冬 日

冬 掃 や 物 子 新 年 へ 東 山
 煤 掃 へ 納 戸 へ 這 入 旭 丘
 煤 掃 へ 不 下 の 夕 空 後 夕
 煤 掃 へ 宿 屋 の 掃 け 夕 空 掃
 煤 掃 へ 日 暮 り 宿 屋 掃
 煤 掃 へ 洞 窟 掃
 煤 掃 へ 荒 神 掃
 煤 掃 へ 具 掃
 煤 掃 へ 此 掃
 煤 掃 へ 此 掃
 煤 掃 へ 此 掃

柳 坊
 五 葉
 此 也
 芽 谷
 抱 琴
 素 心
 一 竹
 一 南
 写 雁 人

餅搗

搗子と運子やす餅
 有所の搗子と心煉を
 煉掃の中とさや木賃
 餅搗子とさや木賃
 搗子自ら練煉を餅の
 餅搗子とさや木賃
 餅搗子とさや木賃
 餅搗子とさや木賃
 餅搗子とさや木賃
 餅搗子とさや木賃

為豆 榎海 桑如 四葉 永早 本筵 周熱 忍山 有傳 玉氏 白起

東京

半歳暮

曆賣 古曆

於賣 節分 豆打

餅搗子一石とる礼一世帯が
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ
 餅搗子や先なるの徳とめ

松秀 五今 餅之 角よ女 五 具 確積 多よ女 雨考 一毛 五 况

年市

くるをとおすや豆を打力
 舟飛豆打者や向河卷
 多の戸や豆打者の心あめ
 通る斗やとりの糸
 とりの糸の浮き下結原の
 羽織着る事も何うらの糸
 とりの糸の糸ある物のは
 糸の糸一把ももつ糸の
 とりの糸にかつぬれは
 糸の糸の糸の糸の糸の糸
 糸の糸の糸の糸の糸の糸

考
 古川
 一南
 耕女
 万里
 水界

年忌

年用意

年木樵

年未

来る年の穡あつてやとりの糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 穡あつての羽織借る
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸
 とりの糸の糸の糸の糸の糸

布席
 斗筭
 考
 古川
 左琴
 湖月
 涼谷
 五峯
 高と古

年尾

年の尾やふ二子居りし年の電
種上し楮言とて紙借る紙

名故

と紙や持紙屋のあつらひ

貞雄 楮海 一甫

行年

行とや札子傳る初後う文
行とや古さのり孔墨四川

楮海 一甫

ゆく年の日よぬそらぬ楮の字
行とやとて持ぬまらしと紙

楮海 一甫

行年やまよ似てる年の若
行と孔市や何実ふ市の林

一具

行と子ま森志とて果報の
行と子ま森志とて果報の

一具

年宵

熱刺とてあつらひ年の宵

一具

年一夜

法ををぬし歳のあつらひ一紙

一具

惜年

日紙高る楮紙くやまらせん

一具

祝二人持とて行とて惜らるる

一具

年名残

楮子をか追とてまら孔名残が

一具

年別

正三の楮とてとて紙あつらひ

一具

年暮

死とてとてあつらひの紙よ年のくれ

一具

手紙ももろとて紙あつらひ

一具

里人の楮子あつらひとて紙

一具

集あつらひとて紙あつらひ

一具

手もまた楮先考とて紙あつらひ

一具

楮本屋のあつらひとて紙あつらひ

一具

大晦日

旅人の袴上りや大晦日
傳のまじり種はや大晦日

李朗
南上女
寸居

除夜

大仙の身も入る除夜の種
算うけきり活きりもたれ除夜の種

兀号
顔老

傳あつく除夜の白ひや舞の粉
人より除夜の以輕りぬ除夜の風

吉陸
素志

厄拂

傳のあまをたると舞うる厄拂
掛より軍書をとめん兼送分

甫石
大貫

掛取

うけよりたをて舞ふも小お目
たより程著し雪舞舞元か

一甫
五岨

春隣

傳の松葉をこ隣りよ特々ろろ
待まのるぬはくろの木の香か

川丈
榎海

春待

人並より真まのん出よとりま
ちも待や一棹の後のるる所り

松常
玄く

春近

人のをさや月一葉のるる真近ま
まきさの来さるるもまぬらみか

五竹
素志

冬題不知

雑子鳴や荒栗あまもとりの内
舞り一葉を枯木をとり角

確嶺
振鳩

小番道子初四城... 花小春が
 石臼... 七室の入
 人亭... 花柳堂
 引ぬ... 大橋
 袴の... 小春
 床橋... 左中
 空掃... 崔九
 以... 橋子... 木...

其水
 全
 全
 水 舟
 全
 全
 全
 全
 全
 全

花... 橋... 舟... 橋... 橋... 橋... 橋... 橋... 橋... 橋...

不流
 燈
 鼎
 湖
 一
 蕙
 水
 春
 冬
 山
 友

袴も先んは袴く芒や荊の中
 厩もあまのの雉子や雪のり
 襪梳も掛まぬ菴や村の雪
 雪の又まもしを焚松葉の
 川上の星くう河多の鴨の雪
 山里も解の乳多しを乳
 志くまや海の破風は乳苗
 江の上の弓張舟や鴨の雪
 白靴の刀ききとく一老のこ
 あり上を襟元より小春乳
 赤柳もむ屋敷の中や柳の雪

其水
 去丈
 全
 管
 乙
 文
 華
 全
 美
 石

志く乳とくく日照山路の
 まく掃も乳飯女の仕り乳
 情も乳藤お子来也又海日
 雪雪のこくく雪雪の雪雪の雪
 降よりい雪雪の雪雪の雪
 程くわの雪雪の雪雪の雪
 雪雪の雪雪の雪雪の雪
 雪雪の雪雪の雪雪の雪
 雪雪の雪雪の雪雪の雪
 雪雪の雪雪の雪雪の雪
 雪雪の雪雪の雪雪の雪

全
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全

儼としてやを亦喜や空の如
 他人の子れ素直のゆゑや素直
 山雀の来興只今くくそこの空
 引舟の横は石ころのまろけが
 風や海のくくゆる陸の音
 春のそと眼よこゆる物皆まろ
 大の子れをうけや春の影
 市燈りかた物くあくこ枝の雪
 空をうらり羽のをもくく巨魁が

習

全 全 乙 全
 全 全 乙 全
 全 全 乙 全
 全 全 乙 全

俳諧十家集句集冬之部



和漢洋書籍發兌店

東京帝國大學 京都帝國大學
 高等師範學校 第一高等學校
 學 習 院 帝國圖書館 御用書肆

發行印刷者

製本發賣所

全

賣捌所

大阪市東區博愛町丁自七番邸

青木恒三郎

青木嵩山堂

大阪市心齋橋筋博愛町

青木嵩山堂

勢州四日市港堅町

嵩山堂支店

